独立行政法人 福祉医療機構 社会福祉振興助成事業
子育て家庭訪問サポート事業　報告書冊子

訪問型子育て家庭支援（アウトリーチ）

ほんの少しのサポートで子育ては孤立しない

— 横つながりの多様性 —

特定非営利活動法人　働きたいおんなたちのネットワーク

CONTENTS

はじめに …… 3
子育て家庭サポート事業概要 …… 4
事業内容
　気になる子育て家庭への訪問サポートの実施 …… 6
　子育てわたしサロン（まるごとサロン）の開催 …… 8
　子育て親子の居場所「Move あるふぁ」の開催 …… 10
子育て家庭訪問サポートの現場から …… 12
　「今・ここ」に必要なサポートを届ける
　妊娠期から１歳くらいまでは、手厚いサポートが必要
　各ライフステージに合わせた家庭支援を
　地域の実家、地域の母だからこそできること
子育て家庭訪問サポート活動報告 …… 16
お母さんを支える大きな安心感の手 …… 17
地域の子育て支援活動に期待 …… 18
子育て家庭サポート事業について …… 19
宇治子育て家庭サポート事業から見えてきた成果と課題 …… 20
子育てを取り巻く状況 …… 21

はじめに

NPO 法人として１４年間にわたり、生きにくさ働きにくさのある人、主に子育て期の女性の自立支援活動に取り組んできました。その活動、特に乳児家庭への訪問活動（年間７００件）や親と子に寄り添うひろば運営、子育て期の女性を対象にしたサロン開催、キッズサポートなどを通して家庭を手助けするサポートのない気になる家庭の存在が見えてきました。

初めての子育てに戸惑う人、泣き止まない赤ちゃんをずっと抱きながら自分の子育ての仕方が悪いのではないかと自らを責める人、「子育てしかしていない」と、自分を受けとめられず働き方・生き方に悩む人、夫と２人の生活が確立したなかで高齢出産し、子どものいる生活への転換がうまくいかずしんどさを抱える人、育ちのなかで家事・子育て等生活全般にかかる知識や経験の習得機会がなかったため乳児が加わった生活にパニックになっている人、結婚や転勤を機に転居してきて孤立したなかで子育てをしている人など、今回の事業を通して子育て中の女性の様々な状況や思いにふれ、家庭や地域で一人ひとりの気もちを受けとめ寄り添うことのできるサポートの大切さを改めて感じました。

地域の子育て支援グループ・団体と協働して、生活の場である家庭や地域でその人の日常の「あたりまえ」を支えると共に、しんどさに一緒に向き合い伴走するサポートを実施しました。とりわけ当事者の「つぶやき・こえ」を傾聴し、いつでもどんな状況でも「母」であらねばならないと頑張っている女性を追いつめることなく“自分のために時間を使っていいんだ”、“しんどい時は人を頼ってもいいんだ”と思えるサポートを届けることで親自身の自尊感情を高めたり子育ての不安やストレスの軽減をしたり、孤立感の解消につなげることが大切だと思いました。

“一人で何もかも頑張らなくてもいいんだ”と思える体験が人と地域への信頼感を生み、本当に厳しい状況に陥ったときに周りへのヘルプを発信できるようになることが児童虐待の未然防止にもつながると考え、今後も取り組みをすすめていきます。

特定非営利活動法人　働きたいおんなたちのネットワーク

子育て家庭サポート事業
事業概要　実施フロー図

コーディネーター会議
（ケース会議）

- 協働団体のコーディネーター　各１名
- 京都文教短期大学 特任准教授
  竹之下典祥（アドバイザー）
- 行政　宇治市　子育て支援室
  保健推進課
  京都府　山城北保健所
- 総合コーディネーター　１名
- 事務局

※4 回（７月・９月・11 月・１月）

乳児家庭全戸訪問事業　乳幼児健康診査事業　養育医療
小児慢性特定疾患　地域子育て支援センター事業
つどいの広場事業　障がいのある子と親のグループ活動
市民団体・グループ・NPO 法人・社団法人等の自主活動

子育て家庭訪問サポート活動

子育て家庭への訪問サポート H25 年８月～H26 年３月 訪問 69 回 家事・子育てサポート 外出同行、傾聴など	協働団体 ・ここあかり　（産後の家事支援） ・Ｃｕｒｕｍｕ　（訪問相談型支援） ・こせい舎　（発達障がい児支援） ・ちゅうりっぷの会 （障がい児支援・産後の子育て支援） ・親と子のこころのｴﾝﾊﾟﾜﾒﾝﾄ研究所 （臨床心理士　親子支援） ・働きたいおんなたちのネットワーク （子育てサポート）

総合コーディネーター・コーディネーター・サポーター

子育てわたしサロン
子育て期の女性をまるごと受けとめる
サロン＊H25 年７月～H26 年３月
毎月第３水曜日（９回）

子育て親子の居場所
孤立しがちな親と子の居場所
H25 年７月～H26 年３月
64日開催 379組 991名

1

事業内容

気になる子育て家庭への訪問サポートの実施

訪問型子育て支援ＮＰＯが協働して支援が必要と思われる子育て家庭を訪問し、当事者の希望を聞いたうえで子育て・家事サポート、産前・産後サポート、外出同行、傾聴などの必要なサポートを実施した。

◆初めての子育てで不安やしんどさを抱える家庭（４家庭８回）

家庭の状況：初めての子育てでわからないことが多く、子育てに自信がない・子どもがよく泣く・抱いていないと泣くなどの育てにくさを抱えている。他県からの転居や働いているため、地域とのつながりが希薄である。高齢出産や職場復職の焦りから乳児のいる生活を受け入れにくくて戸惑っている。母乳での育児を望んでいる・家事ができない自分を責めている。

サポート内容：家庭で母の気持ちを傾聴し母の戸惑いに共感する。食事づくりや整理整頓などの家事が普通にできるようサポート。助産師とのペア訪問で乳房マッサージを実施し、ひろば等の外出に同行。（Curumu・働きたいネットとの協働）

◆産前・産後サポートが必要な家庭（２家庭９回）

家庭の状況：身近にサポートが少ないため第１子との関わりと多胎児の子育てに産前から不安と限界を感じている・サポート体制はあるが初めての出産に強い不安を感じている

サポート内容：多胎児の退院翌日から助産師とのペア訪問で沐浴サポートを実施し、その後は家事サポーターとのペア訪問を実施。母がその時々に希望する内容でサポートを実施した。また、じっくりと母の話を傾聴した。（Curumu・ここあかりとの協働）

◆その他の家庭（３家庭）

家庭の状況：障がいの子どもがいる・夫との関係、子どもの発達、実父母の介護、母の健康など複数の困難な課題あり・子育て中の生き方、働き方に悩んでいる

サポート内容：環境の変化が苦手なこどもに寄り添い、引っ越しや母の仕事の間を安心して過ごせるようサポートを実施した。母の気もちや悩みを傾聴してまるごと受け止めた。

◆サポートにつながらなかった家庭

第１子の療育教室へ同行して会場で第２子をサポートしてほしいとの依頼。コーディネートに伺うが、後日担当課へ連絡したところ同行不可とのこと。自閉症プログラムに沿った内容を無償で長期間のサポートを希望。コーディネートに伺うがニーズと支援内容が合致しないためキャンセルとなった。

サポート後のおかあさんの声

ひとりで子育てしているのがしんどくて話し相手がほしかった。しんどい時の心の支えになってもらえた。（第1子0歳2か月）

人生でこんなに戸惑ったのは初めて。子育てがうまくできないのは自分だけだと思った。（第1子0歳2か月）

サポートは2回だけだったが育休中はこどもと過ごす時間を楽しみたいと思える余裕ができた。（第1子0歳2か月）

初対面のサポーターに抵抗感があったが前回と同じサポーターがペアで同行だったのでスムースにサポートが受け入れられた。

ひろばへ１人で行く勇気がなかったので同行してもらえてよかった。次回からは1人でも行けると思う。（第1子0歳2か月）

周囲のサポートがないなかで、退院後の一番しんどい時期に助けてもらえて嬉しかった。（第1子7歳、第2・3子）

自分以外にこどものことを理解して、かわいがってくれる人ができたことが嬉しい。（第1子2歳7か月）

安心して話せる相手がほしかった。サポートを受けて自分のことを話してもいいのだと思えるようになり、また話すことでこれまではこどものことだけを考えていたが、自分自身のことも考えられるように気もちが変化した。（第1子2歳7か月）

初めはサポートを受けることに抵抗があったが、自分ひとりで双子の世話は無理だと思ったので思い切って利用することにした。これからもサポートがないとやっていけないと思うのでまた利用したい。（第1子7歳、第2・3子2か月）

気づき

- 子育て支援センターからの紹介の事例でサポートの実施にはつながらなかったが気になる家庭へのサポートについての共通認識をつくる機会となった。
- 不安感、負担感が軽減するよう今後も継続したサポートが必要と考える。
- それぞれの課題ごとに専門の相談は受けられているが、母の生活の場で一元的に生じる出来事と向き合い、継続して母と子をまるごと受けとめるところが必要と考える。
- 行政との共通認識の醸成が課題。当事者の求めるサポートをどう具現化するのか、支援側の枠組みで対応しない取り組みが必要と考える。

2

事業内容

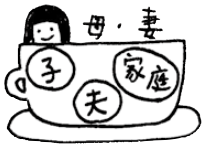
子育てわたしサロン（まるごとサロン）の開催

◇活動目的と内容

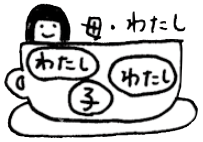
子育てや人間関係で悩んでいる母親をまるごと受け止める少人数のサロン。親が安心して話せるよう保育をつけ、講師１名を配置した。

◆実施期間…平成 25 年 7 月～平成 26 年 3 月（毎月第 3 水曜日 10：30 ～ 12：00）
◆実施回数…９回
◆開催場所…宇治市広野町西浦 100 番地 平和堂１００ＢＡＮ店２Ｆ　輝ら房
◆参加人数…22 組 41 名（９月は台風の影響で参加者なし）
◆内　　容

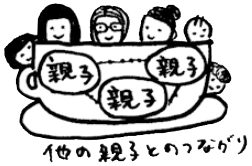
保育士等が話しやすい雰囲気をつくり、夫や夫の親との関係・第２子、第３子のこと・こどもの発達や発達教室・病気などの悩みを共有し一人ひとりを受け止める場ができた。



赤ちゃんの共通点（月齢・抱いていないと泣くなど）で親同士がつながった。また、回数を重ねると、こどもの話しだけでなく自分自身のことや働き方などの話にもなり、内容に広がりが出た。子育て家庭サポートで訪問した親子がこのサロンでサロンデビュー (初体験) をした。



「子育て中は温かい食事をとることも、ゆったり座って落ち着いて食べることも難しい」という参加者の声があり、離乳食にも使えるスープをスタッフと参加者が一緒につくって食事をした。また、参加者同士のつながりもでき、一緒に「親子の居場所」へ出かける親子もいた。



サポート後のおかあさんの声

ふだんは長い時間こどもとふたりっきり。今日はにぎやかに、楽しく話せてよかった。具だくさんのスープもおいしかった

ふだんはこどもと2人で過ごしているので、誰かと話すのが新鮮でリフレッシュできた

初めての保育、特に嫌がらずほかの赤ちゃんたちとふれあってくれ安心した

モヤモヤイライラすることが多い毎日ですが、ここに来ると気持ちが楽になりまた頑張ろうと思う

出産後、家にいることが多かったので外に出て話ができてリフレッシュできた

4月から社会復帰、保育所入所とお互い生活がガラリと変わり不安と期待でいっぱいですが、自分なりに無理せず皆に手伝ってもらいながら頑張りたいと思う。仕事が始まると昼間にこうして子育て中の人たちと話せないので夜のサロンをしてほしい

こどものことだけでなく自分のことも話すことができて、サロンはストレス発散もできる

育休明けでこどもを預けることに不安があったが、ここで初めての保育も体験できて安心した

気づき

初めての子育てに戸惑う親子の家庭を訪問サポートし、こども主体の大きなひろばでは馴染めない母が少人数サロンに始めて参加。そこで知り合った親子と一緒に居場所に出かけるというように、今回の３つの事業が横につながり可視化されたこと。

3

事業内容

子育て親子の居場所「Moveあるふぁ」の開催

◇活動目的と内容

他の親子と触れ合う機会が少ないため、一緒に子育てひろばに出かける知り合いがいない親子の居場所。来た人同士がふれあい、自然に友達になることを目的としているのでイベントは行わない。制限はなく１日何回でも出入り自由。

◆実施期間…平成２４年7月～平成２５年3月
◆実施回数…６４回（火・木曜日10：30～15：30）
◆開催場所…UR 都市機構グリーンタウン槇島中央集会所
◆参加人数…３７２組９６９名
◆内　　容

親と子が自由に安心して過ごせる場・情報交換ができる場にするため、見守りスタッフを配置した。入園や入学、病院、こどもの発達などについて先輩ママに話しを聞いたり相談したりする姿や大きな子育てひろばへ行くときは一緒に行こうと約束したりする姿が見られ、親同士、こども同士の友だちづくりの場になっていた。

訪問サポートを実施し適切な支援を行ったことで「子どものいる暮らしのコツ」をつかんだ親子が、初めて他の親子のいる居場所に来ることができた。その方の赤ちゃんを他の親が交代で抱くなど、親同士で助け合う姿が見られた。また、同じ集会所の別の部屋で活動していた地域の民生児童委員が主催する高齢者サロンとの交流も自然発生的に生まれ、ミニ運動会やクリスマス会などにも親子で参加した。

サポート後のおかあさんの声

- 友だちや話し相手が欲しかったが、ここに来てママ友ができ育児の悩みが減った
- こどもの友だちも沢山できた
- アットホームな雰囲気なので親がリラックスできる
- Moveあるふぁを通して仲良くなったり、知り合いになったりしたお友だちも多くて1人で子育てしなくていいのが良かった
- ここで情報交換ができる
- 他に参加者がいなくてもスタッフと話せる
- 大きなひろばだとグループもあり、1人で行くと孤立するが、ここはスタッフさんも話しかけてくれるし、知らない人でも話しかけられる雰囲気がある
- 親同士で悩みの相談ができる

気づき

・本居場所は、親と子が他の親子や地域の方と顔見知りになり、地域での交流が生まれるような場になることを目指していた。想定どおり生活の場である地域の民生児童委員にもつなぐことができ、地域と子育て親子とのつながりのきっかけづくりの場として機能した。
・本居場所は身近な相談には対応していたが、スタッフが対応できない内容もあったため、相談体制や他団体との連携の必要性を感じた。

子育て家庭訪問サポートの現場から

「今・ここ」に必要なサポートを届ける

必要な人に、必要なサポートが届くようにしたいと考えて、家庭訪問サポートを行ってきました。妊娠期からの訪問サポートを積極的に行うことで、その後の安定した育児につながり、地域とつながるきっかけもできます。

今回の事業では、サポーターさんと一緒に訪問をして、沐浴のお手伝いとお買い物、夕食作りを行いました。サポーターさんより１時間ずらしての訪問だったので、利用者の方にとっても役割が明確に分けられて有意義なサポートができたと思います。

「食べる直前に調理をしなくては」と思い込まれていたようですが、「余裕のあるときに作り置きして冷凍しておけばいいですよ」と伝えると、気持ちが楽になられたようでした。

赤ちゃんがいると、お買い物も一苦労なので、宅配を利用することを進めてみましたが、なじみのお店に行って、店員さんやご近所の方と話すことでリフレッシュできるようなので、お買い物の時間よりも、ご飯作りの時間を短縮する方法をアドバイスしました。

「解凍は電子レンジで OK」、「冷蔵庫にある食材でメニューを考える」等、サポーターの私たちにとっては日常的なことが、利用者の方にとっては目からウロコの情報だったことも。些細なことに思えるかもしれませんが、子育て期の日常生活はこのような些細なことの積み重ねをいかに効率良くできるかで、保護者の負担感を軽減できます。

課題は、このようなサポートを無料で継続するのは難しいということ。今回の事業では利用者の方は無料でサポートを受けられましたが、引き続きサポートに入るためには経済的な負担があります。必要なところには無料または半額でサポートが受けられるような制度があれば、子育て家庭のニーズに合った支援ができる地域になると思います。

ハッピー子育てサポート　ここあかり

男児６人の子育て経験を活かし、保護者の話をじっくり聴いて思いを受け止め、寄り添いながら家事援助や子どもの遊び相手等のサポートを行う。栄養士・ヘルパー資格有。

子育て家庭訪問サポートの現場から

妊娠期から1歳くらいまでは、手厚いサポートが必要

初産婦さんは、自分が産むまで赤ちゃんを触ったことがない人も多く、ネットや雑誌などで、ものすごく情報を集めて「育児はこうするべき」と思い込んで不安になってしまうケースも多くあります。

私たちが訪問した家庭のうち１件は初産婦さんで母乳育児をがんばっておられましたが、思うように出ず、乳房マッサージをして「ミルクを足してもいいんですよ」と言うと、ホッとされました。「仕事を辞めて出産してから３か月、ずっと家にいてストレスがたまる」と聴き、子育て家庭訪問サポーターに連絡。その後、地域の子育てひろばにつないでもらうことができました。

２件目は経産婦さんで、双子を出産され、退院した翌日からサポートに入りました。一度に二人の育児に対する不安が強く、生活の段取りができないくらい余裕がない状態で、レンタルの梱包のままのベビーバスを開けるところからスタートしました。上の子がいることもあり、沐浴の指導をしながら「自分と赤ちゃんが一緒に入って、パパにあげてもらえば」とアドバイスをしましたが、「パパは８時過ぎに上の子と一緒に入るので、双子はその前にお風呂に入れなくては」と、これまでの生活スタイルを変えることが難しく、それがかえって不安感を強くしているようでした。それでも、家事のサポートをしながら３回の訪問が終わるころには、これまで通りにはいかないということに自ら気づき、お風呂の時間帯を変更されました。

未体験の思い込みから「母乳は自然に出るもの」、「こんなに激しく泣くとは思っていなかった」等々、実際に産んでからしんどくなるケースが多数あります。これらは個々の家庭に訪問することで見えてきた現状であり、多数を対象とした妊婦教室ではカバーできない部分でもあると思います。

母親が生き生きと生活するためには、父親の協力や祖父母の手を借りられるか等、家庭によって状況が違うので、その人に合わせたアドバイスが必要です。親子に携わるサポートの役割を活かし、地域のネットワークを駆使して、最低でも赤ちゃんが１歳くらいまでは個別のサポートができれば良いと考えています。

助産師グループ Culumu（くるむ）

助産師２名が、それぞれの親子に合わせた育児のサポートを行う。新生児・乳児訪問・沐浴・沐浴指導・乳房ケア・母乳育児相談・育児相談・妊婦相談など。

子育て家庭訪問サポートの現場から

各ライフステージに合わせた家庭支援を

発達障害は外見上、障害と理解しにくいこともあり、保護者にとってもわが子が障害であることを受容するまでには時間がかかります。公的には「早期発見・早期支援」の整備がなされ、乳幼児期に“発達障害の疑い有”とされて療育が始まるケースも多いのですが、親にとっては寝耳に水で、混乱したまま日々を過ごすうちに、心身ともに疲れ果ててしまうこともあります。

今回、訪問したケースは小学校3年生の子どものことで相談したいが、2歳の妹を連れて出かけるのが大変なので自宅に来てほしい、という要望でした。きょうだいがいる場合は、外出するのも一苦労で、下の子をベビーカーに乗せている間に、上の子が道路に飛び出す、ということもあり、親は片時も目を離せないことが多々あります。別の家庭の親は、地域の子育てサークルやひろば等に行きたくても、他の子のおもちゃを奪ったり、大声で騒いでしまうので行くのが怖い、という声もあります。また、家族にさえ「甘やかすから言うことを聞かないのだ」と言われ、親は孤立し、理解されないまま、育児に追われているのです。

発達障害児に対する支援はもとより、その親に対して身近なところで相談・支援が受けられる体制づくりが急務であるといえます。現状では福祉・医療・教育等の関係機関それぞれが断片的な支援になっていて、発達段階に応じた生涯にわたる一貫的な支援になっていないと感じます。

その家庭のニーズを把握し、必要に応じて訪問し、共感的理解を示しながら話をじっくり聴くことで、親は自己肯定観が高まり「また今日からがんばる」力が湧いてきます。そうしたことから、それまで否定的に捉えてきたものごと等も、肯定的に捉えることができます。適切な支援を受けることは、発達障害児のいじめや不登校等の二次弊害も食い止めることができ、ひいては子育て家庭にとっての負担感や不安感を解消することにつながるのではないでしょうか。

発達障害支援　一般社団法人こせい舎

子どもの発達障害がきっかけとなり、当事者目線の支援を作りたいとの思いで立ち上げた団体。PCを使った学習支援・家庭に入って支援を行うパーソナルサポーター派遣・ペアレント・トレーニング等を実施。

子育て家庭訪問サポートの現場から

地域の実家、地域の母だからこそできること

「子育て中のお母さんが、ほっこりできるようなことをしたい」と、退職した保育士3人が集まって【ちゅうりっぷの会】を作りました。月3回、開催している『かずばぁの家』は乳幼児の親子がゆっくりできる“地域の実家”。子どもたちに合わせた優しい味のお昼ご飯を一緒に作ったり、食べたりしながら、過ごしています。いつもは忙しくて、ゆっくりご飯を食べる時間がないお母さんたちも、ここではサポーターが子どものお世話をするので、お母さん同士でおしゃべりしながら食事ができます。

2011年に始めたこの活動は、クチコミで徐々に広がり、毎月延べ20組の親子が参加するようになりました。これまで「小さな子がいるので上の子（小1）の勉強を見てほしい」とか「ご飯を作ってほしい」、「おけいこの送迎をしてほしい」などの要望に応えてきました。自宅出産をされた家庭には、産後すぐに訪問をスタートして父親が休みの土日以外、ほぼ毎日、2～3時間のサポートを実施。そこでは赤ちゃんとお母さんのケアのほかに、洗濯や掃除、ご飯作り等、娘の家を手伝うような形で行いました。人見知りが強いお母さんでしたが、私たちが毎日入れ替わりでサポートに入ることで、ずいぶんと心を開いてくださいました。困ったときに声をかけられるようになると、心が安定してきます。環境的にも、精神的にも孤独だと、子育ては行き詰るんです。結婚を機に、自分が育った地域ではない所に住み、初めての子育てに戸惑っているお母さんは決して少なくありません。「今まで自分の思うように生きてきたのに、子どもができたことで思うようにいかなくなった。イライラは募るけど、親としてやらなくてはいけない…」と感じている人もたくさんいます。お母さんの気持ちを受け止めて、少しのお手伝いをすることで、母であることを誇りに思い、外に出て人とつながり、子育てを心から楽しむことができるのです。

サポートをしたお母さんから「子どもが可愛くなってきた」との言葉を聴き、このような活動が必要なのだと実感しています。
私たちのような『近所のばあちゃん』的な人が地域の中で、増えていってほしいと思います。

ちゅうりっぷの会

京都市営保育所を退職した保育士3名が毎月3回、金曜日に自宅を開放して子育てサロン『かずばぁの家』を開催するほか、個別相談や訪問サポートにも応じている。

子育て家庭訪問サポート活動報告

孤立しがちな気になる子育て家庭を訪問型支援でサポートしようとする団体が協働して子育て家庭訪問サポート活動を実施しました。

サポート活動では当事者のおもい・こえを傾聴し、望むサポートを実施することで数回のサポートでも自信を回復したり、抱える課題に向き合えるようになったり、一人では行けなかったひろばに継続して参加し自分の得意なことでつながりを強めたり自立していく姿がみられました。

協働団体は子育て家庭が直面する様々な困難の緩和のために地域で日々、それぞれの専門性、領域、強みを生かして活動していますが、今回の事業では当事者の希望に沿う子育て家庭への具体的なサポート活動を通してつながり、一つ一つの事例からみえる課題をコーディネーター会議での検証作業で共有することができました。

また、行政の実施する乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）、乳幼児健康診査事業、地域子育て支援センター事業、つどいの広場事業等との連携も視野に入れた活動をするため、宇治市、京都府との共通認識を醸成することに努めました。

今後は公益性、当事者性を大切にしながら地域で子育て家庭が孤立せず、母が自尊感情を損なうことなく、追いつめられることもない子育て、安心できる親同士や地域の支援活動とのつながりのなかでの子育てができるよう協働団体の連携を深めた支援活動をすすめていきたいと思います。

特定非営利活動法人　働きたいおんなたちのネットワーク

生きづらさ、働きにくさのある方の仕事や活動の場を提供したり、地域の人財となる方々と一緒に地域づくりを行っている。

お母さんを支える大きな安心感の手

初めての出産子育て、知らない土地での子育て、高齢出産、多胎児、発達障害、身内に頼れる人がいない、離婚など、どの事例も子育て期の女性が出くわすさまざまな困難を抱えていることが浮き彫りになっている。

子育て期は、女性の人生にとってとてもハイリスクな時期だと思う。それまで自分の思うとおりに生きてこられた人も、一転して、自分の欲求を抑えて、赤ちゃんの欲求を先に満たしてあげないといけない生活が 24 時間 365 日続いていく。普通に眠り、食べることさえが後回しになる。しかも、未だに子どもを預けて息抜きすることに罪悪感を持つ母親も多い。

この時期の母親たちに何よりも必要なのは、まずは、子育てを実際に手伝ってくれる人の手であり、若い母親たちが子どものためにと親として頑張ろうとしていることを「よくやっているね」と認め、尊重することだろう。更に、大人として話を聞いてくれる人を求めている。小さい子どもの子育てをしていると、仕事を持っている場合を除けば、誰とも一日中話さなかったということが起きてもおかしくない。しかし、人は誰かと対話することで、自分を振り返ることもでき、誰かと対話して自分の考えをことばにすることで、それを客観的に見る目も育てていける。客観的に自分を見つめ、子育てを振り返れるとき、本来その親が持つ問題解決の力が引き出される。

だれもが子どもとのしあわせな関係を望んでおり、それを支えるためには親に寄り添う人が必要なのである。「助けて」と言ったときに、すぐに助けてくれる人がいる安心感。安心して頼っていいんだよと、子育て中の母親たちを包む大きな両手があることが、何よりのセーフティネットになるだろう。そんな社会を目指した第一歩が、今回の取組の意義であろうと思う。

臨床心理士　馬見塚珠生

親と子のこころのエンパワメント研究所

”子どもの虐待のない社会、すべての子どもが幸せな社会”を目指し、子育て支援専門職を中心に活動。子育ても子どもも知らぬまま親になる若い親たちに具体的で効果的親教育プログラムを届け、親子のよい関係づくりを促し虐待発生予防に取り組む。

地域の子育て支援活動に期待

今回２回のコーディネーター会議に参加したことで、宇治市と市民団体の協働による子育て家庭サポート事業の実際を知ることができました。孤立しがちな母親、育児疲れ、子育て不安など、気になる親子への支援を、専門職（保育士、助産師、保健師、栄養士等）等の役割を適切に組み合わせてサポートすることで「不安感の軽減」「親子広場への参加」等の効果が見られたことより、本事業は虐待を未然に防ぐために大きな役割を果たされました。行政としても、支援が受け入れられやすいようなアウトリーチを含む環境づくりに一層努力して参ります。宇治市には、多くの子育て支援団体が活動されており、子育支援の大きな強みでもあります。それらの団体と行政が、うまく連携・協働することで、宇治市全体の子育て支援の輪が拡がることを、これからも期待しております。

京都府山城北保健所

子育て家庭サポート事業について

保健推進課では、妊娠期から出産子育てへの支援を、家庭訪問や健診、相談事業等を通して行っております。

妊娠・出産・子育ては、女性にとっては身体的にも精神的にも大きな変化が見られ、男性にとっても親としての自覚をもち、自分自身の家族への責任を強く感じる時期です。

しかし、経済的な問題やお互いの信頼関係がもてないなどの問題があると、出産後の生活への不安は大きくなり、産後は不慣れな育児も重なって精神的にも追い込まれてしまうことがあります。

そのようなときに、誰かに話を聞いてもらったり、手助けしてもらえたら、不安も軽くなり、また子どもと向き合おうという気持ちも生まれてきます。子育ては、誰もが自信をもってできるものではなく、一喜一憂しながら子どもも親も育てられるものだと思います。

今回、取り組まれた子育て家庭サポート事業は、子育てに悩む親にとって、さまざまな不安やニーズが受け止められ、コーディネートされた支援を受けられるという点で、大変効果的な事業であると思います。今後、コーディネーターの役割や関係機関との連携の在り方、支援内容など、さまざまな角度から分析検討し、本市の子育て支援体制に生かしていくことが重要であると考えております。

宇治市健康増進室保健推進課　高田智恵子

＊　＊　＊

この度は、各団体の協働で実施していただいた「子育て家庭サポート事業」について、それぞれのご家庭の支援に多くの成果を挙げることができたと伺っております。こういった訪問によるサポートについては、様々な課題を抱えておられる子育て中のご家庭に対して、きめ細かく支援を実施していく一つの形として、非常に意義のあるものでございます。宇治市といたしましても、子育て家庭がどのようなニーズをお持ちであるのか把握しつつ、今後の子育て支援施策のあり方についてさらに検討を進めてまいりたいと考えております。また、子育て支援施策は、行政だけではなく、こうして日々、子育て支援にご尽力いただいている皆様によって支えられております。平成２７年度には新しい制度が施行予定とされておりますが、皆様のご意見等も十分いただきながら準備を進めてまいりたいと考えておりますので、宇治市の子育て支援に、引き続きご理解とご協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

宇治市健康福祉部　子育て支援室　こども福祉課

宇治子育て家庭サポート事業から見えてきた成果と課題

宇治の特徴を示すユニークな事業である。

家庭訪問型の子育て支援を行う団体が任意で規模は小さいが、堅実な訪問支援を実践していて、今回、特定非営利活動法人働きたいおんなたちのネットワークが要となり、複合体による協働事業として実施された。そのことにより、子育てに困難を抱えている家庭のニーズに応えることを可能にした訪問型子育て家庭支援の総合化が図られたといえる。

参画した各団体は、小規模ながら確りとしたコンセプトをもち、丁寧な活動を等身大で実践してきていた。子育て家庭の何を支援するか焦点化されており、容量や限界も踏まえた堅実な活動展開を行ってきたといえる。

他方で、支援の限界から方向性が同じ他団体との協働を模索してきた団体が少なからずあった。市町村には民間福祉の推進のための中間支援組織として社会福祉協議会が存在するが、ネットワーク会議には宇治市や京都府の関係機関が加わり、まさに子育て支援訪問型事業に特化した協議会組織で、この協働事業の実施は大変に意義深いものである。

今回取り組まれた個別ケースのどれもが子育てにリスクの高い家庭に支援に入っている。３大リスク要因として知られる①第一子、②障碍、③多胎児、の全てに支援に入っている。何より子育て家庭の助けとなったと考える。

加えて、ケースの状況に応じた柔軟な対応と支援を行っている。妊娠期からの支援家庭への介入が行われたことも含め、ニーズに基づいた派遣であった。今回は参画団体すべてが動員されてはおらないが、試行事業としての成果を十分に挙げたといえる。

今後については、事業を継続実施していくのか、参画団体間で十分なコンセンサスが必要である。民間資金の活用も行われたが、継続の条件として行政や社会福祉協議会等との協議も含めて可能性を推し量る必要がある。

最後に、全国的には特定非営利活動法人ホームスタートジャパンが中間支援組織として、子育て家庭訪問型支援事業「ホームスタート」を全国的に展開している。この事業を参考に実施された点も多く見受けられる。ホームスタート事業との関係や整合性をどうつけていくのか。また、必要性についても再検討をお願いしたい。

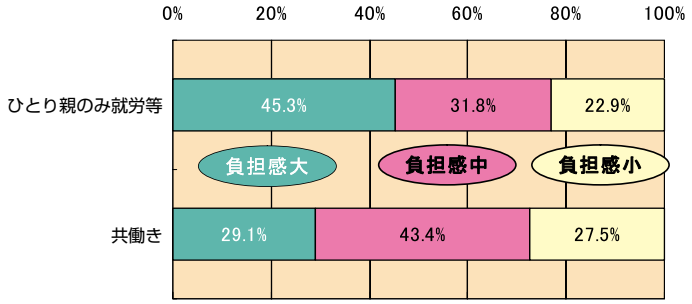
京都文教短期大学　特任准教授　竹之下典祥

子育てを取り巻く状況

３歳未満の子育ては、家庭でなされている場合が多く、その負担感も大きい。

子育ての負担感

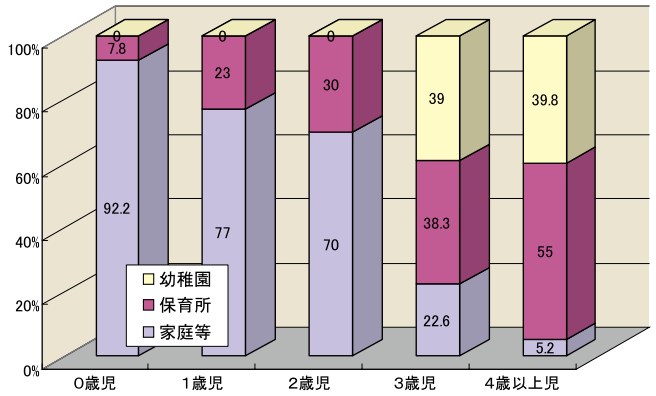
専業主婦家庭の方が、共働き家庭よりも子育ての負担が大きいと感じる割合が高くなっていますが、共働き家庭も「負担感大」、「負担感中」をあわせると、７割以上と負担を感じる割合が高くなっています。



内閣府『少子化社会白書』（平成 19 年度版）

就学前児童が育つ場所

就学児童のうち、3 歳児未満（０～２歳児）では家庭で育てられる割合が高く、保育所に入所している割合は約２割です。また３歳児以上になるとほとんどが保育所又は幼稚園に通っています。



内閣府『少子化社会白書』（平成 19 年度版）

親と子のこころのエンパワメント研究所
<親子支援>

前向き子育てトリプル P プログラムなど、臨床心理士がさまざまな親子に向けて支援を展開。

Curumu(くるむ)
<訪問相談型支援>

妊婦相談・新生児・乳児訪問・育児相談などを助産師が行う。

ここあかり
<産後の家事支援>

栄養士・ヘルパー有資格者が心にぽっとあかりを灯すようなあたたかいサポートを実施。

一般社団法人 こせい舎
<発達障害支援>

発達障害の個性を活かし、才能を伸ばすことを目的に、生活支援・学習支援等を行う。

ちゅうりっぷの会
<障がい児支援・産後の子育て支援>

地域の母、地域の実家を目的にアットホームな居場所と訪問サポートを実施。

働きたいおんなたちのネットワーク
<子育てサポート・生き方・働き方応援>

週に２時間からの働く場づくりを展開するほか、宇治市乳幼児全戸訪問等、家庭サポート事業も実施。

発行　特定非営利活動法人 働きたいおんなたちのネットワーク
〒611-0021
宇治橋通り事務所：京都府宇治市宇治妙楽 155-5
TEL　0774-23-5390　FAX　0774-22-6165
E-mail　information@npohatarakitai.net

発行日　2014 年 3 月 20 日

制作・デザイン他　Art work shop つかいで屋
中野久美　ハルキハルコ

印刷　有限会社 新進堂印刷所

独立行政法人 福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

子育て家庭訪問サポート事業　報告書冊子

特定非営利活動法人 働きたいおんなたちのネットワーク